

静岡県立自然系博物館構想を巡る動向(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 通玄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025196

静岡県立自然系博物館構想を巡る動向(1)

伊藤 通 玄*

本会会誌第73号(1996)に若干の経緯を報告した標記博物館構想を巡るその後の動向について簡単に報告し、その具体化に向けての会員各位ご支援・ご協力を切望する。

5月12日 本会も主要構成団体である静岡県立自然系博物館推進協議会(以後、自然博推進協と略称)の第1回総会(静岡県女性総合センター)を開催し、経過報告、会計報告、会員・協力委員に関する報告、今後の活動についての討議があった(参加者約50名)。

総会后、糸魚川淳二先生(名古屋大学名誉教授)の記念講演「日本の自然史博物館、これまでとこれから」が行われ、これからの博物館を考えるうえで大変参考になった。

7月26日 自然博推進協として、千葉県立中央博物館(千葉市中央区青葉町)を見学し、展示部門、研究・教育部門、収納・保管部門、情報処理部門など、バック・ヤードを含む全般について詳細な説明を受け、多くの知見を得た(参加者18名)。

9月9日 静岡県企画部主催の県立自然系博物館構想に関する懇談会が行われ、自然博推進協実行委員3名(伊藤二郎・伊藤通玄・杉山恵一)が出席し、1995年7月提案書(会誌73号に掲載)にそつて、本県にふさわしい博物館、重点をおくべき博物館の機能・活動、備えるべき施設・設備などについて、企画部長ほか5名と意見交換した。

11月9日 第1回自然史博物館セミナー(静岡県教育会館)を開催し、自然博推進協の提案した博物館構想の具体化について討議した(参加者17名)。

11月29日 自然博推進協として、豊橋市自然史博物館(大岩町)を見学し、展示部門、収納・保管部門、研究・交流部門を中心に詳しい説明を受け、多くの知見を得た。

12月20日 この間の討議や知見を踏まえた「県立自然史博物館基本構想の早期策定についての提案書」を杉山直哉企画部長に提出し、基本構想の早期策定、分野別研究職員・教育職員・事務職員等の計画的採用に努め、各種資料・標本の収集・整理、データ・ベース化、展示内容の検討などを進め、その成果を県民に公開するとともに展示基本計画、博物館建設基本計画の策定に反映されるよう提案した。

12月26日 自然博推進協・県地学会共催で開館間もない滋賀県立琵琶湖博物館(草津市下物町)を見学し、開館に至る経緯、博物館の全容説明を伺い、交流ゾーン・管理ゾーン・情報ゾーン・展示ゾーンを中心に見学し、多くの知見を得た。

1月14日・2月18日 静岡県企画部主催の自然系博物館構想に関する懇談会に自然博推進協関係者(土隆一・池谷仙之・熊野善介・山村京子・清 邦彦)ほか出席し、博物館のテーマ、機能・活動内容、具備すべき施設・設備、スタッフなどについて率直な意見交換を行った。

3月16日 自然博推進協の第2回総会を静岡県教育会館で開催し、第1回総会以降の活動報告、会計

*静岡県地学会会長

報告ののち、本年度の活動を巡って討議した。引続き先進的な自然史系博物館の見学会、博物館活動に関する講演会の開催、自然博推進協通信（論説・報告・紹介・随筆など）の発行のほか、合同野外観察会の具体化などの提案があった。

静岡県としては、97年度当初予算に計上された「自然系博物館構想検討費」による調査・検討を進め、本年度中に構想（案）を固めたいとのことである。

総会に先立ち、異色の博物館として国内外から注目され、多くの来館者で賑わっている「琵琶湖博物館の着想から開館まで」と題する布谷知夫総括学芸員（事業部長）の記念講演があり、「魅力的な博物館作り」について認識を深めた（講演要旨を次号に掲載予定）。

参考資料 自然博推進協が提案した静岡県立自然史博物館の基本構想第2次案（一部省略）

（96年12月20日、静岡県企画部長に提出）

I 全体構想

1 設置目的

本博物館は豊かな自然との調和や多様な生物との共生が大きな人類学的課題となっている現在、地球環境の変遷や多彩な生物の進化の歴史のなかで、本県を中心とする「変化に富んだ多様な自然の生い立ちや多彩な生物相がどのように生み出されてきたか」、「本県の変化に富んだ多彩な生物相と人々の関わり」などについて、これまでに蓄積された豊富な資料（実物・標本・模型・映像など）をはじめ、新たな視点で調査・収集・研究される各種資料を保存するとともに、精選された各種資料を多様な媒体を通じて系統的・計画的に展示・公開し、「自然との調和や生物との共生」について県民および来館者の理解と交流を深める場、自然に親しみながら「地球および地域の環境の保全・改善に努める広範な担い手を育てる場」として設置し、静岡県民をはじめ広く国の内外に開かれた研究・教育・文化施設として多彩な情報を発信することをめざす。

2 基本テーマ：東・西のフロンティア しずおか

本県の中・西部はユーラシアプレートの東縁、本県の東部はフィリピン海プレートおよび北米プレートの境界域に属し、まさに東・西のフロンティアに相当する活発な地殻変動地帯である。

この活発な地殻変動の結果生じた多様な地形・地質・気象・土壌・水環境のなかで、多彩な動植物が適応・移動・進化をとげ、今日見られる生物地理区（東部・中部・西部・伊豆など）を形成するとともに、これらと共生しつつ県土を開拓・利用してきた先人たちのたゆまぬ努力によって、様々な文化や産業が創出されてきた。これらの先人たちのフロンティア精神によって、東・西文化や産業の交流・発展がはかられて来たことも本テーマを設定した理由である。

3 活動の内容

- (1) 本県を中心とする自然史関連文献・資料・標本などを地球的視点に立って調査・収集・分類・整理し、必要な保全措置を加えたうえ保管するとともに、緑の国勢調査資料や開発行為に関わる環境アセスメント資料・出土資料などの収集・保管・公開にも努め、特定の調査・研究課題について個人研究・共同研究・総合研究などを積極的に進める。
- (2) 得られた成果はその重要性・緊急性に応じてマルチ・メディア化（実物標本・研磨標本・薄片標

本・液浸標本・剝製・複製・模型・文字・数値・図表・写真・映像・音声など) し、館内外の展示、交流活動(各種イベント)・広報活動などを通じて、環境教育・生涯学習の素材として広く情報提供する。

- (3) 最新のハードおよびソフトを活用して、基本情報システム(文字・数値・図表・写真・映像・標本類)を構築し、博物館利用者の便を図るとともに、国際情報ネット・ワークを通じて国内外の諸機関・団体・個人などと自由に情報を交換し、共有することができるようにする。
- (4) 館内施設および館外施設(自然観察園・鳥獣保護センター・野外実験実習施設など)やテーマ館周辺の自然などを活用して、支援団体・ボランティアなどの協力のもと、地域の自然および自然環境の保全・復元などについて、各種のイベント(自然観察会・体験学習会・実技講習会・環境調査など)を計画的に展開する。
- (5) その他、時代の要請および利用者の要望に応え、啓蒙的な学習会・講演会・討論会・特別講座・企画展示・移動展示などを積極的に開催し、本博物館の設置目的を達成することに努める。

II 構成と機能

国際情報ネットワークで結ばれた中核館(公平な県民サービスに努める見地から中部地域への設置が望ましい)と地域特性を反映させた複数のテーマ館(富士火山周辺・伊豆半島・駿河湾・牧の原・大井川上流・天竜川中流・浜名湖周辺など)で構成する。

1 中核館の機能

類似の機能を具備した既設館が存在しない「新構想の博物館」であることを踏まえ、保管・展示すべき各種資料の調査・収集・整理・保全・研究・加工(マルチメディア化)に当たる専門職員(研究職・教育職・技術職)の計画的採用を先行させ、各種資料の調査・収集・整理・保全・研究・加工を進め、それらの成果を展示基本計画、施設建設基本計画の策定に反映できるように努める。

(1) 調査・研究・保管機能

地形・地質、岩石・鉱物・土壌、大気・気象・気候、河川・湖沼、海洋・海底地形・海底地質、地殻変動、古植物・古動物、環境変遷、菌類・地衣類、藻類、コケ植物、シダ植物、裸子植物、被子植物、植物生態、無脊椎動物、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類、動物生態分野などの各種資料の調査・収集・整理・研究・保全・保管機能 [研究職+教育職約 30 名]

(2) 情報処理・情報提供機能

資料調査・研究活動で得られたオリジナル情報ならびに情報ネットワークを通じて収集された各種情報の整理・分類・加工・保管・運用・公開(広報)・交換・貸借などの機能 [技術職+教育職約 15 名]

(3) 展示・教育・交流機能

調査・研究、情報処理活動の成果を踏まえた展示内容の企画・立案、展示物の作成(委託)・管理・改善、各種解説の作成・整備・改善、各種イベントの企画・広報・実施、友の会・ボランティアの育成、学校教育・生涯教育との連携などの機能 [教育職+技術職約 15 名]

(4) 管理・サービス機能

庶務・経理、保守・管理、福利厚生、関係機関・団体との総合調整などの機能 [行政職+技術職
約15名]

2 テーマ館の機能

当面、中核館の整備を先行させ、中核館で展示・紹介した本県の自然的特性の具体例として、本県の地域特性を代表する複数の地点を選び、特定テーマを中心とするテーマ館を段階的に整備し、中核館と情報ネットワークで結合する。その際、新設の独立館とするか、関連県有施設または自治体施設への併設とするか、県有施設または自治体施設の転用・再整備とするかは今後の検討に委ねる。各テーマ館は周辺の自然を活用した体験学習（自然観察会・野外調査活動など）の拠点として位置づける。

(1) 「富士火山」(東名HW御殿場IC～富士IC周辺)

富士火山周辺の環境情報・調査資料・標本などを活用し、富士火山周辺の自然史（富士火山周辺の地形・地質、富士火山の構造、富士火山の生い立ち、地形・地質・気象・気候・土壌と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）を主テーマとする。

(2) 「伊豆半島」(伊豆スカイラインまたは伊豆中央道ぞい)

伊豆半島の環境情報・調査資料・標本などを活用し、伊豆半島の自然史（伊豆半島の地形・地質、伊豆半島の生い立ちと火山・温泉、地形・地質・気象・気候・土壌・海況と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）

(3) 「南アルプスと大井川」(大井川上流～中流域)

大井川流域の環境情報・調査資料・標本などを活用し、南アルプス・大井川の自然史（大井川流域の地形・地質、南アルプスの生い立ちと大井川、地形・地質・気象・気候・土壌と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）を主テーマとする。

(4) 「牧の原と御前崎」(牧の原～御前崎)

牧の原周辺の環境情報・調査資料・標本などを活用し、牧の原～御前崎台地周辺の自然史（牧の原～御前崎台地周辺の地形・地質、牧の原～御前崎台地周辺の生い立ちと大井川、地形・地質・気象・気候・土壌と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）を主テーマとする。

(5) 「小笠山と磐田原」(小笠山運動公園周辺)

小笠山～磐田原周辺の環境情報・調査資料・標本などを活用し、小笠山～磐田原周辺の自然史（小笠山～磐田原周辺の地形・地質、小笠山～磐田原台地の生い立ちと大井川・天竜川、地形・地質・気象・気候・土壌と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）を主テーマとする。

(6) 「浜名湖とその周辺」(東名西IC～庄内半島～弁天島周辺)

浜名湖および浜名湖周辺の環境情報・調査資料・標本などを活用して、浜名湖およびその周辺の自然史（浜名湖周辺の地形・地質、浜名湖の生い立ちと天竜川、浜名湖の湖沼環境と生物相、周辺の地形・地質・気象・気候・土壌と生物相）と人々との関わり（土地利用・産業の変遷と生物相の変化など）を主テーマとする。

(7) 「駿河湾と遠州灘」(駿河湾沿岸)

駿河湾および遠州灘周辺の環境情報・調査資料・標本などを活用して、駿河湾・遠州灘の自然史（駿河湾・遠州灘の海底地形・海底地質、駿河湾・遠州灘の生い立ち、水温・水質分布とその変動、海洋環境と生物相）と人々との関わり（海洋環境の変遷と生物相の変化、未来像など）を主テーマとする。

III 中核館の施設・設備

人と自然に優しい施設整備をめざす。具体的には弱者・高齢者への配慮、バリアヤ・フリーのアプローチと内部構造、周辺環境および景観に調和した耐震・耐火・省資源・省エネルギー・低負荷型の施設整備に努める。

館内諸施設・展示内容と屋外施設・設備（自然観察園・野生鳥獣保護センター・体験学習施設・簡易宿泊施設など）との有機的関連にも留意する。

資料保管・収蔵部門、調査・研究・情報処理・加工部門、展示・教育・交流部門の配置と動線に配慮し、博物館職員と来館者との交流が密になるように努める。

エントランス・ホールまたは映像ホールで「プレート運動と静岡県」（静岡県を中心としたプレート運動の過去・現在・未来）を表現したシンボリックな大型可動模型または、立体映像投影がなされることが望ましい。

1 展示室

- (1) 常設展示室1 「地球環境の変遷と生命の進化」をテーマとした導入展示室であり、地球環境の変遷（地球の誕生と進化、大気・海洋環境の変遷、大陸の出現と環境変遷）、地球環境と生命（生命の誕生、海生生物の発展と地球環境、陸生生物の発展と地球環境）、地球生命の営み（生命の進化、適応、繁殖、寄生と共生、擬態、移動など）、人類と地球環境（人類の出現と発展、狩猟・農耕時代、産業革命以降、現状と将来）などを扱う。
- (2) 常設展示室2 「日本列島・静岡県土の形成と自然の特徴」をテーマとした主展示室1であり、日本列島の形成（古～中生代の日本周辺、第三紀の日本周辺、第四紀の日本周辺）、日本列島の自然（亜熱帯～寒帯気候、活発な地殻変動、多様な自然環境）、静岡県の自然特性（プレートの境界領域、東西日本の接点、多様な自然、多彩な生物）、駿河湾と遠州灘（海底地形・海底地質、水温・水質、海流変動、海生生物の特徴など）を扱う。
- (3) 常設展示室3 「県東部・県中部・県西部の自然環境」をテーマとした主展示室2であり、県東部の自然特性（火山性の地形・地質、温泉活動、気候特性、多彩な生物相）と土地利用、県中部の自然特性（非火山性地形・地質、多様な気候特性、多彩な生物相）と土地利用・生物相の変遷、県西部の自然特性（非火山性地形・地質、気候特性、生物相）と土地利用・生物相の変遷、静岡県の生物特性と生態系の変化（静岡県の特産種、絶滅危惧種、帰化生物、生態系の変化など）を扱う。
- (4) 特別展示室 各種資料・情報の収集活動や調査・研究活動の成果を踏まえた多様な企画展示に対応できるよう、多目的使用に適した構造・機能を保持するように配慮するとともに、企画展準備室を併設する。

2 関連施設（館内）

- (1) 調査・研究・保管系施設：研究室、資料処理室、実験室、特殊実験室、標本・模型作製室、一時保管庫、収蔵庫、特殊収蔵庫、映像作成室、映像収蔵庫など
 - (2) 情報処理・情報提供系施設：情報処理室・情報管理室・情報提供室・映像資料室・図書室・映像ホールなど
 - (3) 展示・教育・交流系施設：展示準備室、インストラクター室、ボランティア室、体験学習室、実験・実習室、研修・講座室・会議室・多目的ホールなど
 - (4) 管理・サービス系施設：館長室、事務室、応接室、会議室、特別研究室、支援団体室、救護室・授乳室、休憩室、軽食・喫茶室、売店、ロッカー室、洗面・トイレ室、防災センターなど
- * 設置条件・財源等の制約があるが、天体観測施設、気象観測施設、地震・火山活動観測施設などが併設できれば、研究・教育上のメリットは大きい。

3 関連施設（館外）

- (1) 自然観察園（ビオトープ） 静岡県其自然特性を反映させた古期岩層とその土壌、新期岩層とその土壌、火山性岩層とその土壌の分布を再現的に造成し、その上（または中）に生息する生物相を生態展示する。その際、本県の山地・丘陵・段丘・低地・河川・湖沼・海岸などの地形に応じた植生分布、すなわち、照葉樹林（上力広葉樹林）、夏緑樹林（落葉広葉樹林）、落葉二次林、針葉樹林、草原～荒原植生、湿地・湿原植生・水生植生、海岸植生などを可能な限り再現させる。
これらの植生分布に対応して、水生昆虫・淡水魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類などを生態的に飼育展示（または模型展示）する。
- (2) 野生鳥獣保護センター 生息環境の急速な変化（悪化・破壊など）のため、野生鳥獣の負傷が近年急増しており、それらを保護・治療する機関もパンク状態となっている。そのうえ、治療しても再びもとの生息環境に戻せない鳥獣が多い。これらの鳥獣を保護・治療のうえ、上記の自然観察園で飼育しつつ生態展示できるよう、自然観察園に野生鳥獣保護センター（専門職5名程度）を付置する。
- (3) 野外実験・実習施設 小・中・高校生の野外観察・野外調査・標本作製・標本観察などの体験学習に関連して、ガス・電気・水道・シンク付実験実習台、実験実習用器具・装置および備品棚などが整備された屋外実験実習施設を設置する。
- (4) 簡易宿泊施設 既設の自然系博物館では、簡易宿泊施設が有効に機能している。研究者や大学院生・学生が調査・研究のために長期滞在する場合、学芸員志望学生が博物館実習のために中期滞在する場合、小・中・高校生が引率教師とともに野外観察や野外実習のために短期滞在する場合など、その利用頻度はかなり高い。30～50名程度の宿泊が可能な簡易宿泊施設（研究者・指導者用個室3～5室、2人室3～5室、4人室6～8室、キッチン付簡易食堂、バス・トイレ・洗面所、集会室などを含む）を設置する。
- (5) 屋外駐車場 博物館の規模・内容・立地条件で異なるが、自動車利用の来館者が多いと予想される場合には、十分な駐車場スペース（例えば大型用10～20台、小型用500台以上）を確保する。